



スカル・バレー・ゴシュート居留地

国で、負の遺産を背負ってきたのは先住民族だ。冷戦期のウラン開発の大半は、先住民居留地で進められた。連邦議会が一九八七年に全米唯一の高レベル放射性廃棄物最終処分の建設予定地に指定したヤッカ・マウンテンは、もともとはウエスタン・シヨシヨニ族の領土である。九〇〇回以上にもなる核実験が行われたネバダ実験場を見下ろしている。原発を持たないネバダ州が、なぜゴミを押し付けられるのか。同州の政治力の乏しさに加え、この場所は既に汚染されているという論理が働いたからだ。

一九九〇年代初頭、ネバダ州政府の猛反対などを理由に遅々として進まない最終処分計画にしびれを切らし、電力会社は放射性廃棄物の暫定的な受け入れ先を探しはじめた。自ら受け入れを申し出たのは、ユタ州の砂漠地帯に暮らすスカル・バレー・ゴシュート族だった。多額の土地賃貸料と、少しばかりの雇用機会が目当てだ。貧困と過疎化に悩む人口三〇人弱の先住民居留地に、全米各地から核のゴミがやって

くる可能性が生まれた。が、ユタ州にも原発はない。

大統領選で接戦になったネバダ州での勝利を目指し、最終処分場建設計画の中止を公約に掲げたバラク・オバマは、就任後に関連予算を打ち切った。現在は、有識者委員会によって代替案が検討されている。ヤッカ・マウンテン計画に反対するいっぽうで、オバマ政権は原子力発電を推進している。三月末の大統領演説は、福島事故に言及しつつ、安全性を確保できれば原子力発電はやはり重要なエネルギー源であると強調した。廃棄物処分の見通しが立たないまま、これを生み出す原子力発電を推進するというおかしな論理がまかり通っている。

過疎の村に並ぶ原子力発電所は社会的な不平等の産物であり、格差と差別を再生産する装置でもある。首都圏に電力を供給してきた福島県の人たちがリスクを背負い、故郷を追われ、生活の糧を奪われた。現場には残酷な労働空間が生まれ、経済的な選択肢と機会がますます減少する。「電力は東京、放



廃墟と化した低所得者用公共住宅の廃墟 (ニューオリンズ)

福島第一原子力発電所の事故は、ただ収束の目処が立たず、たくさん人のびとが、避難生活や移住を余儀なくされている。福島ナンバーの車が石を投げられ、子どもがいじめられるという話や、大阪の西成区あいりん地区の日雇い労働者が、事故現場で作業にあたりながらという報道もあった。そんな話をきくたびに、アメリカ合衆国で環境人種差別の現場を歩き、目にした景観が目につく。

アメリカでは一九九〇年代以降、環境破壊の最前線に暮らしてきた貧しい

有色人種のコミュニティが、「環境人種差別」を告発する、「環境正義運動」が発展してきた。社会的な弱者が、生活、労働、学習の場でリスクを負担してきた不平等と差別を是正し、皆が安全に暮らせる環境を可能にする公正な社会を追求する動きである。

環境人種差別の暴力は、色分けされたアメリカの地理空間に、長い時間をかけて織り込まれてきた。二〇〇五年に南東部を襲ったハリケーン・カトリーナで甚大な被害を受けたのは、堤防のない低地に住む貧困層の黒人だった。

アスベスト等の有毒物質を含む被災地の瓦礫を処理した日雇い労働者の大半は、中南米系の不法移民だった。防護服やマスクも与えられず、宿泊施設もシャワーもない現場で、彼らは危険な作業をつづけた。災害廃棄物の処分場のひとつは、ベトナム系移民が多く住む地域に設置された。四年半後の昨年一月に被災地を訪れると、電気も水道も復旧していない地区は廃墟と化していた。行政当局に見捨てられた、絶望の風景である。

核の時代の先端を走ってきた経済大



Noriko Ishiyama

政治経済学部准教授
人文地理学、地域研究(アメリカ合衆国)

1971年 東京生まれ
日本女子大学文学部英文学科卒業
(アメリカ研究専攻)
2002年 ラトガース大学大学院地理学研究所博士課程修了(地理学Ph.D.)
日本女子大学、専修大学での非常勤講師を経て、2004年 明治大学政治経済学部専任講師。2007年より現職。2009～2010年度は在外研究で、カリフォルニア大学バークレイ校環境科学・政策・管理研究学部客員研究員。

【主な著書】
[米国先住民と核廃棄物 環境正義をめぐる闘争] 明石書店(2004)でアメリカ学会清水博賞受賞。